ソ連時代の記憶：キルギスにおける画像資料化の試み[1]

ティムール・ダダバエフ
筑波大学大学院人文社会科学研究科　准教授
東京大学人文社会学研究科次世代研究センター客員准教授

中央アジアは、19 世紀後半に帝政ロシアの植民地とされた後、1917 年のロシア革命を契機として政治、社会、文化のあらゆる領域で社会主義化を経験した。そして、およそ 70 年にわたるソ連時代には、現代世界でも他に類をみないほどの大規模な変革が進行した。そして、1991 年のソ連解体後、中央アジア諸国は新しい独立国家として国際社会に参入した。各国は、政治と経済の大転換をめざすとともに、国家と社会の安定をはかる努力を続けている。その過程で、中央アジアの人々も大きな変容を相次いで経験してきたが、彼らは自分たちが生きてきたソ連時代を分析し整理する機会を十分にもたなかった。それは人々の現代を見る眼にも影響を与えている。

独立を果たしたキルギスは、多くの国々と国家間関係を発展させ、国際社会と積極的に関わり始めた。社会主義経済から市場経済への転換が進行し、政府は広範囲にわたる改革を実行しはじめた。その過程で、キルギス社会には統一感よりも経済的格差による社会分裂が生じている。変化の波に乗り遅れてしまった人の多くは現状に満足できず、ソ連時代という過去を美化しがちである。多くの場合、こうした人々はソ連時代が現在よりも良かったと考え、彼らの間にはノスタルジーが広がっている。そのような傾向は、かつてのエリートや、社会でもっとも脆弱な層に顕著である。彼らは今もなお過去に縛られ、現在起きていることもすべてソ連時代というフィルターを通して理解しようとする。確かに、現在中央アジアで起きていることの多くは過去と関連しており、ソ連時代のメンタリティや、その時代の物事に対する姿勢から影響を受けている。しかし同時に、過去の重要性はそこから教訓を得ることで現れるはずである。それは人々に前向きの力を与えることにもなるだろう。

本企画は、中央アジア・キルギスの人々がソ連時代をどのように記憶しているか、そのインタビュー調査記録を画像として保存、公開することを目的とする。ソ連時代の記憶は、ソ連解体後の現代においても、人々のアイデンティティや現代史の理解において重要な意味を持っている。本プロジェクトは、ソ連時代を生きた比較的高齢の人々を訪ねて普通の人々の目線から見た当時の社会や生活の記憶を収録する。それを映像資料として保存、公開することにより、ソ連時代と現代の急速な変容とを相対化してとらえ、人々が新しい社会の形成において前向きの展望を得る契機を提供したい。ソ連時代の記憶は今記録してお

[1] また今回、本報告書を日本語と英語の両方で発表したが、それらは日本語と英語それぞれを別々に作成したもので、お互いを翻訳したものではない。その理由は、日本語から英語、英語から日本語にそのまま翻訳すると、表現や文章に違和感があると考えたためである。対比すれば分かるように、この日英の報告書は内容的に同じ対象を扱っているが、構成が若干異なっている部分がある。それぞれの言語で、より自然な文書に仕上げるために文書全体の読みやすさに重点をおいて書いたものである。

かなければ、永久に失われてしまうだろう。

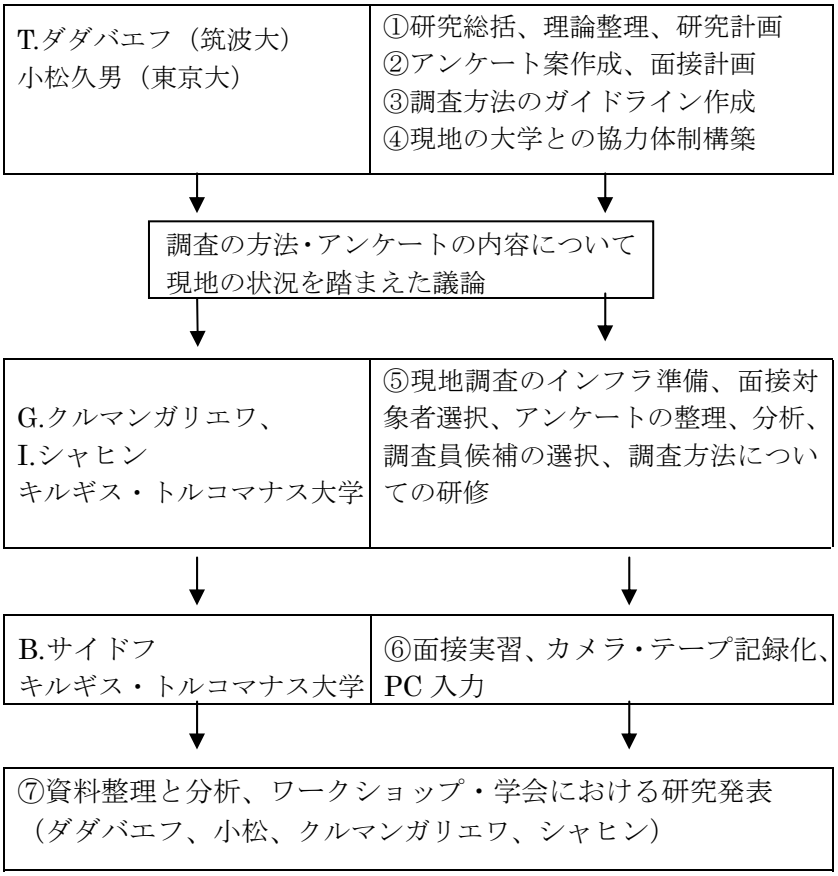
1. 研究体制と研究方法

研究体制

ティムール・ダダバエフ、筑波大学人文社会科学研究科　准教授（代表者）

分担者

小松久男、東京大学人文社会学研究科教授
イルハン・シャヒン、キルギス・トルコ・マナス大学（キルギス）　教授
G・クルマンガリエバ、キルギス・トルコ・マナス大学（キルギス）
（2009 年からマルティペ（トルコ）大学）准教授



キルギスの学術研究において第一線で活動する研究者と共同で作業を行い、その成果を関係研究機関の研究活動の中で利用してもらうことを目指した。具体的には、キルギス・トルコ・マナス大学の研究者をパートナーとし、インタビューの録画作業や画像化を計画段階から議論し実行した。これは、研究対象地域からの問題提起と地域外の研究者（申請者）の研究関心の双方を活か

すことにつながり、調査およびその成果を強化することができた。

本研究にとっては、ソ連時代における様々な出来事、民族問題や社会問題に対するコミュニティの役割を調査・分析する上で、現地の各コミュニティ・民族の長老、リーダーや NGO 実践家、企業家らの幅広い参加を反映させ、本研究の成果（映像データベース、ドキュメンタリーなど）をこれらの組織、団体の教育活動の中で利用してもらうことが不可欠である。

研究手法

人々の日常生活を通して歴史を検討するにあたり、研究チームは以下三つの手法を組み合わせながら使用した。このような三つの手法を組み合わせることは、本書が取り組むような分野では一般的に使われており、triangulation と名付ける研究者もいる。

第一の手法は研究対象になる人々の中に入り込み、一定の時間を過ごしながら観察し、インタビューを実施することである。[2] そのような手段を用いる意図は、ソ連時代の中央アジアにおける人々の日常生活は具体的にどのようなものだったのか、対象者らの人生にいかなる特徴と相違があったのか、そして、それらがいかに当時の時代的特徴やキルギス、より広くいえばソ連の政治状況を表していたのかを探るためであった。

第二の研究手法は、ソ連時代のキルギスに関する情報、ステレオタイプ（偏見、固定観念）、文献などを批判的観点から再検討することであった。ここでいう批判的観点とは、単に「何かに共感できないから批判する」のではなく、ソ連時代のキルギスにおける人々の社会参加、ものの見方、国家に対する姿勢などに関して、従来の理解とインタビューによって現れた現状とを照らし合わせ、相違を追及することである。つまり、現在まで存在してきた偏見、固定観念を問い直し、人々の生活や彼らの歴史観に関して新しい見方を提供することである。

第三の研究手法は、インタビュー対象者がソ連時代における人々の生活について述べたことをもとに、当時の日常を再現する一環として、「参加型」の研究を試みることであった。インタビューの際に様々な疑問をなげかけ、回答者に刺激を与えた。これは、研究チームと研究協力者が、インタビューに応じた人たちと共にソ連時代のキルギスにおける人々の日常生活の実態、問題点、利点を共同で考えることを意図している。その手法のコンセプトは、家族もしくは親戚、友人などによる内輪の人生話である。単に一人が語ることを皆で聞くのではなく、そこで交わされる話を聞き、インタビュー回答者や実際にインタビューを行う研究協力者が話し合いに参加する。そのような仕組みを通して、ソ連時代の日常生活と人々がどのような考え方のもとで生きていたのかをより明確にしていく。話し合いの成立過程と仕組みについては次節で詳説する。

それらを補完するために、インタビューの観察（テープと個人的に参加する）や、インタビュー内容の時期に関連する資料の収集・分析も行った。

---

[2] 似たような聞き取り調査を通して一般の人々の経歴と国の歴史をすり合わせ、公式な歴史の理解を試みることについて、Susan A. Crane, “Writing the Individual Back into Collective Memory”, *American Historical Review*, Vol.102, N. 5, December 1997, pp. 1372-1385 を参照。

インタビュー対象者の選定

人々が語る歴史は、それを誰に聞くかに左右される。回答者の選定方法はいくつかあるが、本研究においては主に四つであった。すなわち、①極端な事例を選ぶこと(deviant case sampling)、②同類の社会的・背景を持つ人を選ぶこと(homogenous sampling) ③もっとも多様な事例を扱う(maximum variation sampling)④ネットワークサンプリング(network sampling)である。まず、著者たちは、本研究に便利な事例を扱うこと (convenience sampling)や類似した事例を扱うことを避けた。むしろ、可能な限り、異なる人生を生きた人々を選び、生き方の多様性を明らかにすることに努めた。そのために、著者たちは上述の方法の中から主に③を選択し、知り合いや研究者、様々な人の親戚ネットワークなどを活用してインタビュー回答者を集めた。

キルギスの全州から対象者を見つけることを前提とし、首都のビシケクや人口・面積の面で大きな州から 5-6 名ずつ、小さな州から 2-3 名ずつ選び、インタビュー総数である約 75 人に対し、インタビューを実施した。

上述のインタビュー対象者数を確保するために、本企画の研究分担者とその協力者はインタビュー対象を選定する際にネットワークサンプリングを利用した。具体的には、トルコ-キルギス・マナス大学教授や同大学のクルマンガリエワ講師の協力を得て、各州出身の3、4年生に依頼して、その出身地で両親や祖父母の話を聞いてもらった。語りの内容はレコーダー（メモリースティック）に記録したが、可能な限りビデオ撮影を行って、映像資料として保存した。トルコ-キルギス・マナス大学以外のルートでもネットワークサンプリングを実施した。いくつかの事例に関しては、インタビューの信憑性の検証も兼ね、研究分担者が再度その地域を訪ね、人々にインタビューを行い映像資料として記録した。

2. 本研究の意義と特徴

研究意義

本研究で使用された手法は、主に、聞き取り調査、二次資料収集、人々が自分で書いた人生の記録である。このようなアプローチを採用する日本の研究者は少なくなく、海外でも最近非常に人気がある。中央アジア地域でこのような手法に基づいた研究は少ないが、比較的近年に発表されたものの中では、『ソ連と呼ばれた国に生きて』[3]、『中央アジアにおける「帝国の子供達」』[4]（以下、『帝国の子供達』）や、『過去に疲れさせられた（人たち）』[5]（カッコ内は筆者注、以下同）や『帝国の端っこにおける生活―ソビエトキルギスタンのオーラルヒストリー』[6]がある。これらは、聞き取り調査をもとに書かれた文献だが、その

[3] 岩上 安身, 片岡 みい子, 古田 光秋, 正垣 親一、『ソ連と呼ばれた国に生きて』、JICC 出版局、1992 年。
[4] Kosmarskaia, N.P., *"Deti imperii" v postsovetskoi Tsentral'noi Azii: adaptivnye praktiki i mental'nye sdvigi : (russkie v Kirgizii, 1992-2002)*, Moskwa: Natalis, 2006.
[5] Tokhtakhadzhaeva M. *Utomlennye proshlym: Reislamizatsiia obshchestva i polozhenie zhenshchin v Uzbekistane,* Tashkent, 2001.
[6] Sam Tranum, *Life at the Edge of the Empire: Oral Histories of Soviet Kyrgyzstan*, Bishkek: American University of Central Asia, 2009.

課題設定、認識、対象グループ、目的は本書と大きく異なっている。

例えば、『帝国の子供達』は、かつてキルギスに住み、ロシア語を話し「ロシア化」された人々を取り上げ、彼らのソ連崩壊後の状況や問題、そして現時点まで生きた人生に対する見方を、聞き取り調査や世論調査の結果、歴史的資料を通して考察した。ここで指摘しておくべきなのは、『帝国の子供達』が研究者としての観点からみて重要な課題を取り上げているものの、同書が、主な検討対象はいずれかの国家の国民全体、もしくは中央アジアの市民一般というよりもキルギス出身で「ロシア化」された人々であると強調している点である。そのような背景を鑑みれば、キルギス出身の「ロシア人（ロシア化した住民)」を考察対象とした同書は、主旨や目的、手法などの点で本研究と異なるものである。

『帝国の子供達』よりも本書に概念的に近く興味深いのは、1992 年に刊行された『ソ連と呼ばれた国に生きて』や、近年刊行された『過去に疲れさせられた（人たち)』、『帝国の周縁における生活―ソビエトキルギスタンのオーラルヒストリー』である。これらは、聞き取り調査の実施、対象グループの選択基準といった点で本研究と共通する部分がある一方、テーマや調査対象のジェンダーは異なっている。

以上に対して、本研究は、ポスト社会主義のキルギスを事例に、①キルギスに居住する 60 - 80 歳代（多民族、６州）の普通の市民からソ連時代の記憶を収集、②ソ連時代の日常生活の記憶と公定の歴史との比較・分析、そして③人々の記憶を画像資料化して保存と公開（ドキュメンタリー作成）を行った。

本研究の特徴

本研究のアピールポイントは以下の五つである。

第一は、本企画は、①ソ連解体後のキルギスのアイデンティティ形成に重要な意味をもつ資料や情報を収集し、②それらを画像資料として保存、公開することを目標とすることである

第二は、ソ連時代を経験した人は現在 60 代から 80 代になっており、彼らの証言や考え方は今のうちに記録しておかなければならない。彼らが亡くなると、人々の記憶に関する言説は推測に過ぎないものとなり、政治的に操作されやすいものになってしまう懸念もある。

第三は、キルギス市民のソ連時代の記憶を対象とする日本とキルギス双方の研究者の共同作業である。これを通してキルギスにおける情報保存という課題に対する理解を深め、キルギスおよび旧ソ連中央アジア地域の社会に関する一次資料を提供する。

第四は、証言の収集、画像化、保存と公開という一連の作業を通して、ソ連時代のキルギスにおける人々の日常生活は具体的にどのようなものだったのか、普通の人々の生活は、当時の時代的条件やキルギス、より広くいえばソ連の政治状況とどのように関連していたのかを探る。

第五は、ソ連時代のキルギスに関する情報、ステレオタイプ（偏見、固定観念)、公定史書などを批判的な観点から再検討すること。ここでいう批判的な観点とは、単に「何かに共感できないから批判する」のではなく、ソ連時代のキルギスにおける人々の社会参加、

ものの見方、国家に対する姿勢などに関して、従来の理解とインタビューによって現れた現状とを照らし合わせ、相違を追及することである。つまり、これまでの偏見や固定観念を問い直し、人々の生活や彼らの歴史観に関して新しい見方を提供することである。

3. 現地調査における課題

概念的な課題

本書の研究においては、手法以外でも重要な課題が多い。「概念的な挑戦」としてまず挙げられるのが、「記憶」は本当に記憶なのかということである。例えば、人々が他から得た情報を、記憶として自分の頭の中に記録してしまう事態も十分考えられる。人々の記憶を検討対象とする上では、このような限界があることを著者たちは認識している。

さらに、「時代から影響を受けた『記憶』」という問題がある。独立した現在、人々は、当時は「スターリンが悪かったのだ」とか「スターリンがこういうことをした」といった細かな話を聞き、それらに基づいて、自分たちの考えを構成してしまう。また、現在の立場によっても「記憶」は異なる。つまり、現在非常に裕福な生活を送っている人たちの「記憶」と、貧しい生活を送っている人たちの「記憶」とは全く異なる。なぜなら、現在が、彼らの「記憶」に最も影響を与えるファクターの一つであるからだ。つまり、ソ連時代が良かったのかどうかを、自分たちの現在が良いかどうかによって判断する人たちが多く、ソ連が崩壊すべきだったのか、それともソ連に未練があるのかといったことは、それを判断する人の現在の立場によって大きく違ってくる。そのため個人的な体験で時代を語ってしまう人も少なくない。しかし、これについては、われわれとしては弱点というよりもむしろ利点ではないかと考えている。つまり、人々が個人的にその時代をどう見たのかを知ることが、われわれの目的でもあるからだ。

インタビュー実施における課題

次に、サンプリングの制限がある。サンプリングの面では、すべての地域の人々の生活を反映するよう努めたが、それを完全に達成することはできなかった。

サンプリング以外の課題もある。たとえば、その一例は、インタビューでは、他者の介入というのが非常に困った要素である。例えば、孫による祖父へのインタビューで、その息子、つまりインタビュアーの父が脇にいる。この場合、祖父の答えは、横で父が言っていることの影響を受けてしまいがちである。しかし同時に、このような年齢の人にインタビューする際には、質問の内容がよく理解されていないということも生じる。横に頼りになる誰かがいるということは、その質問をわかりやすく説明してくれる利点もあり、プラスマイナス両方の側面があると考えられる。近親者のインタビューへの参加や質問の解釈を制限すればインタビューそのものが成り立たず、制限しなければインタビューされる人の回答が近親者の解釈などに左右されてしまうことがある。この点を今後どのように修正

すべきか考えていきたい。

4. 本研究の成果

本研究の成果として以下のことがあげられる。まずは、日本と現地の研究者がキルギスの 60 代から80代の一般の人々の証言、資料や情報を共同で収集するだけでなく、画像化とデータベース化による保存と公開を目指してきた。その結果、2009 年 4 月から 2010 年にかけて、複数の共同現地調査が実施されており、これらを通して 75 人の高齢の回答者の意見を集めることができた。これらの文書化と翻訳が進められていると同時にこれらのインタビューの映像が加工されて公開のための準備が進められている。第二に、本研究の研究成果は複数の国際会議において公表されており、これらはケンブリッジ大学、イスタンブール・マルテペ大学、ストックホルム大学で開催されたものである。また、本研究の成果は『記憶の中のソ連―中央アジアの人々が生きた社会主義時代』という著書の形で刊行予定である。第三に、本研究の過程を通して、日本と現地の研究者や市民の間にソ連時代の記憶というキルギス市民の遺産に関して共通の認識や理解を深め、より客観的な歴史観を形成することができるよう努力がなされた。さらに、本研究は、普通の人々の記憶を収集するとともにこれを映像資料として市民に還元し、その共有化をはかるという特色がある。これは、広く近現代史と現代の変容、様々な不安定要因や社会内の諸問題に対するローカルレベル（一般国民の目線）での認識の深化を促すと思われる。

なお、このようなプロジェクトの場合、インタビューの実施と記録に時間がかかるため、まだ具体的な成果をまとめるに至っていないのが現状である。本研究の成果の詳細については、後日、JFE 21 世紀財団のアジア歴史研究助成プロジェクトであることを明記した報告書をまとめ、財団HPを通して改めて研究報告を公開する予定である。

最後になるが、本研究はJFE21世紀財団の2008年度アジア歴史研究助成の成果である。支援をいただいた財団に対して心よりお礼を申し上げたい。

Remembering Soviet Past: Recording and Compiling Audio-Video Materials on Everyday Life Experiences and Public Memory in Post-Soviet Kyrgyzstan[1]

Timur Dadabaev, Associate Professor, University of Tsukuba
Adjunct Associate Professor, University of Tokyo

Throughout the history, Central Asian states have experienced a number of historical changes which challenged the basis of their traditional societies and life-styles. The most significant ones are brought about by the revolution of 1917 in Russia and 1918 in Central Asia, incorporation of this region into the Soviet Union and gaining of independence as a consequence of the collapse of the USSR. However, impartial and informed public evaluation of the past and its understanding has always been a complicated issue in Central Asia over Soviet and post-Soviet periods under various influences.

Two the most important and detrimental factors shaping public perception and opinion regarding their present and their past have been "official" historical discourse and everyday life experiences of populations. "Official" historical discourses can take many forms and every often exemplified by official historiography, which characterizes what was "politically correct" to consider to be "good" and "bad" among the events of the past. There has been a long tradition of history construction in Central Asia when political pressures and official ideology always had a decisive say in how the history is interpreted and eventually constructed. Such approach to constructing history was practiced both in the Soviet period with the aim of beautifying Socialist society (well documented by the Communist-era archives) and in post-Soviet period, criticizing Soviet past and praising post-Soviet society building (demonstrated by current literature on history in Uzbekistan and Kyrgyzstan).

These "official" descriptions of the past sometimes confirmed but more often contradicted interpretations of the past, when made when past is analyzed through the lenses of the everyday experiences of ordinary people.

It is this contradiction in depicting the history which lies at the center of this project. This project attempts to collect, record, preserve and make public the views of public regarding their Soviet-days experiences and memory of the Soviet past using the case-studies of Kyrgyzstan. In particular, this project aims to contribute to understanding of relationship between the governmentally-endorsed history of Central Asian people in the Soviet era and their private lives and believes. In order to do so, this study attempts to contribute to academic knowledge on how people remember their Soviet past and what were their

[1] While this report has been made available both in Japanese and English languages, it should be mentioned that these were not manual translations of one another but written separately, in both languages to accommodate the specificity of expressions and styles of each language. Therefore, while the content of the reports in Japanese and English is the same, structurally these two reports do not necessarily copy each other. This has been done in order to facilitate easier comprehension of the essence of the project and for the sake of cultural flexibility required in explaining comprehensive notions in various languages.

memories of their experiences of that time. This also leads to a better understanding of how these memories relate to the Soviet and post-Soviet official descriptions of the Soviet life.

This project attempts to achieve its goals through the collecting, recording and analyzing the narratives of ordinary people, their views regarding political practices (repressions, staff indigenization, administration of things, etc), economic policies (collective farm formation, industrialization, economic cadre education, etc), social life (forms and shapes of community and religious life in the Soviet times) and many others.

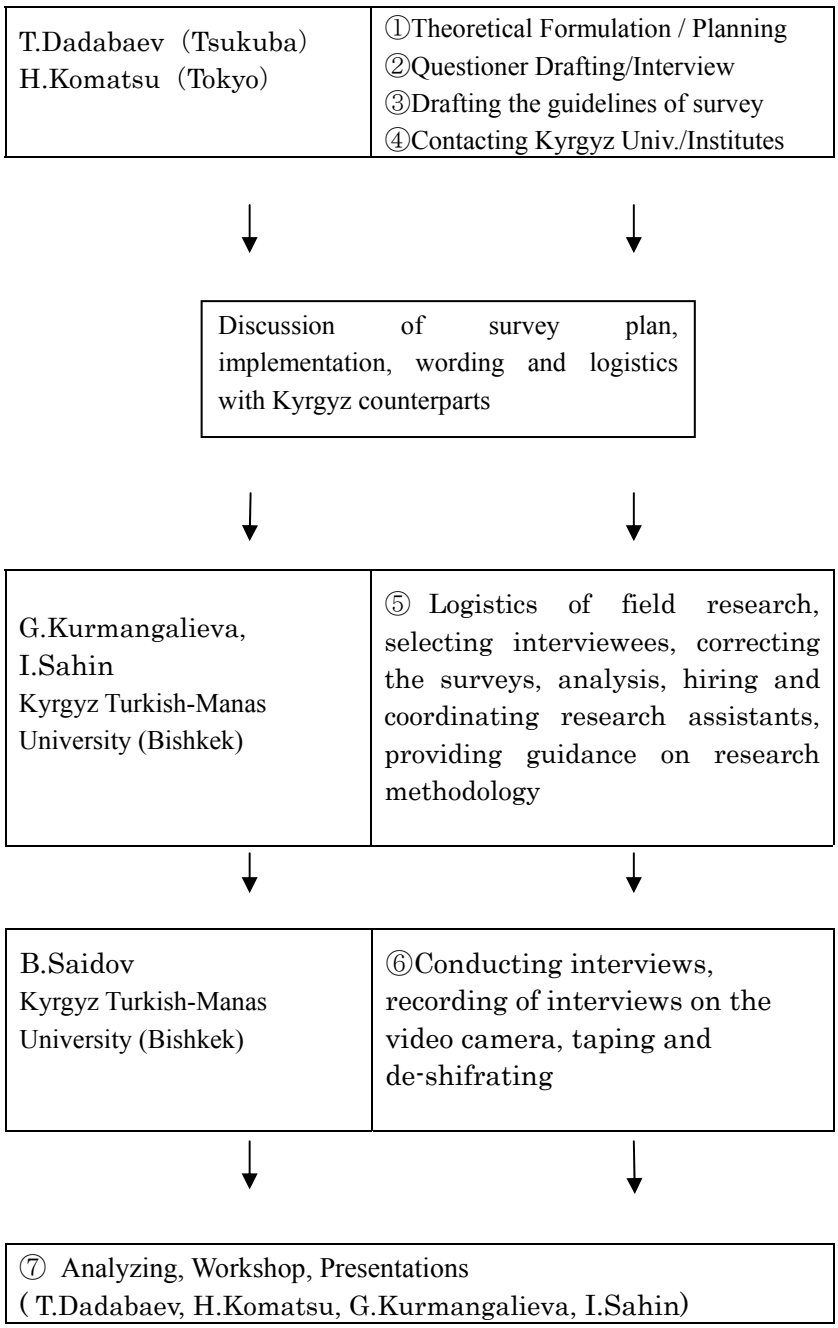
As a methodological tool, this study is part of the data-collection project of the "Memory of the past" (co-organized by the Universities of Tokyo, Tsukuba, World Economy and Diplomacy in Tashkent and Turkish-Kyrgyz Manas University in Bishkek) over the period of 2005 to 2010 in Uzbekistan and Kyrgyzstan. Thematically, the project focused on the recollection of memories on the people's everyday experiences in the times of the Soviet Union. Therefore, the project aims to use the recordings of the memories of everyday life in Soviet Central Asia and relate those to the official recordings of history. The project targeted ordinary people of the 75 years of age and over with questions regarding their everyday life experiences in the various period of their lives. By doing so, the project aimed to collect information about how ordinary people regarded and understood the reality of their time and how this understanding related to official policy of the Soviet government in Central Asian region. The choice of the everyday life experiences of people as the main focus of this study is considered to be one of those instances which presents relatively apolitical picture of the societal life of that time, which was largely ignored in Soviet and post-Soviet studies. In addition, the information provided by the interviewed in the older age group represents a unique data which, if not collected and recorded now, can be lost due to rapid decrease of those who remember the social environment of the Soviet times. The loss of such data will result in false interpretations, assumptions and speculations without an opportunity to check these against the reality of everyday lives of that time.

1. Research team

Timur Dadabaev, Associate Professor, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba, Research Leader

Collaborators

Hisao Komatsu, Professor, University of Tokyo
Ilkhan Sahin, Professor, Kyrgyz-Turkish Manas University（Kyrgyz Republic）
Guljanat Kurmangalieva, Senior Lecturer, Kyrgyz-Turkish Manas University（Kyrgyz Republic
（From 2009, Associate Professor, Maltepe University, Turkey）



2. Sampling method and respondents

The process of sampling for collecting, recording, storing and analyzing the data used in this article has been one of the most difficult tasks as it had the potential for influencing and in certain cases, shaping the answers to the questions asked. In order to cover the conceptual gap in the literature regarding the views of the ordinary citizens regarding their societies in the Soviet time, the interviewees were collected mostly

from the older generations and especially those beyond their retirement age. This is done to cover the memories of the Soviet time by those who spend the most active years of their lives in the Soviet cultural and social environment. These recollections were then either recorded on the audio-tapes (in the case of Uzbekistan), video-records (in the case of Kyrgyzstan), put into the script, translated and are in the process of being archived.

Out of the four possible alternatives for sampling, namely, deviant case sampling, homogenous sampling, maximum variation sampling and network sampling, authors decided to avoid as much as possible the convenience sampling and homogenous sampling in order to avoid the situation when the outcomes of the interviews are similar and predetermined in their content. On the contrary, the project attempted to locate people who led very diverse life-styles, based on diverse regional, ethnic, educational, social, professional and other affiliations.

In terms of regional representation, in the overall sample size of 75 people, the utmost effort has been made to select more interviewees (5-6 people) from capitals, larger, hence more densely populated regions, while ensuring that interviewees from the demographically smaller regions are also represented.

The network sampling has been applied to overcome difficulties associated with political restrictions and self-restrains on the side of interviewees for a fear of repercussions while in Kyrgyzstan, the network sampling has been used to locate people from remote areas which are difficult to gain access to.

3. Interviewing

In order to facilitate open and interviewee-friendly environment, the project used the following four techniques in the process of interviews. Firstly, the cultural flexibility and proper wording of the questions was paid special attention. While given the choice of structured (with strictly defined questions), semi-structured and open-ended options for formulating questions, the study opted to use semi-structured method due to its better applicability to the realities of the region. Using structured interviews in Central Asia often results in short, non-inclusive, incomprehensive answers because of the lack of rapport between interviewee and interviewer. On the one hand, using open-ended interview might have also potential risk of developing into an extensive exchange of opinions and develop into a direction unrelated or distant from the topic of everyday life experiences of Soviet times due to the broad spectrum of issues. Therefore, the semi-structured interview, which includes clearly defined question and some sub-questions to clarify the meaning of the main questions were used with interviewees given the opportunity to develop their story as far as it does not move away from the main topic of the interview.

Secondly, interviewers attempted to establish rapport with the interviewees by discussing some unrelated to the project topics such as the general well-being of those being interviewed, discussion of weather and other topics. In addition to establishing trust between interviewers and interviewee, such long introduction has deep cultural meaning in Central Asia where people are used to use relatively long, introductory

conversations before proceeding to the heart of the issue that they are interested to talk about. This, within the course of this project and in daily life in general in Central Asia, develops a basis for a smoother conversation and offers a chance for interviewees to get to know the other side and shape their own attitude to them.

After such an introductory entry into conversation, the interview proceeded with the questions asked about the topics related to the everyday life experiences of Soviet time. In order to facilitate an open discussion, the project employed an approach when in the course of interview, interviewees' assumptions were on several occasions critically assessed or even challenged in order to provoke them to offer a deeper insight into how they came to the assumptions and conclusions they were operating. Yet, the careful attention has been paid to not radically challenge the flow of the talk and not to discourage the interviewee from laying down his/her assumptions.

And thirdly, project members attempted to make the process of interviewing more "participatory" for both interviewee and interviewer by not simply listening to the memories recalled by interviewees but also, on several occasions, having the family members of interviewees and those close neighbors listen and then sometimes make their own comments which father encouraged the process of remembering and forced interviewees to use more detailed recollections of the past in order to support their own logic. It was especially so with older generation of interviewees who seemed at times to have problems with understanding the essence of the question or having problems remembering the periods in which certain events took place.

4. Challenges, limitations and biases

There were few conceptual and logistical problems in the course of interviews. Firstly, the mentality of the ordinary people has influenced the outcome of the interviews both in Uzbekistan and Kyrgyzstan. In both cases, interviewers observed the situation when respondents are often reluctant to speak about negativities of the Soviet times. This can be explained by several reasons. In addition to potential political and related pressures which will be discussed later in the text, many of respondents are bearers of the culture when taking about one's problems and criticism outside of the society is considered to be shameful and needed to be avoided as much as possible. In both societies, people shared the logic of local saying that "Garbage should not be taken out of the house". Therefore, in many cases, interviewees were inclined to speak more about positive sides of the issues than negativities. In addition, the attitude of interviewees towards interviewer differed significantly depending on the developed or underdeveloped rapport between interviewee and interviewer. For many of them, interviewees were "strangers" and it is not an accepted norm to speak about negativities to the "strangers".

In order to encourage the interviewees to be more open about various aspects of their Soviet past, the interviews were often joined by the members of the family or grandchildren in front of whom many elders

could not misrepresent the realities of their past lives. When there were such few attempts, members of the families listening to the interviews often intervened correcting and clarifying certain issues both to the interviewer and interviewee.

Another challenge was encountered with the language in which interview should be conducted. Due to the multiethnic nature of the societies in Central Asia, Kyrgyz was used for those belonging to the titular ethnic group and preferring to answer in their own language. For the Russian and Russian-speaking groups (like Koreans, etc), Russian language questioners have been used. In certain instances, questioners in alternative languages (Turkish-language one for Turks, etc) were drafted and used. But diversity of the languages used for questioners, did not present a technical problem, except for the logistical concerns relating to translation.

Much bigger problem was the obvious correlation between the language of the questioner and the pattern of asking questions and answers to these questions. In Kyrgyz, interviewee had to go through the long procedure of first explaining in length the background of the issue and then asking the question. Otherwise, the answers were either inadequate or too short and mostly shallow. In Russian language, however, such procedure of going into the long discussion of the background of the issue and its details resulted in an irritation of the respondents and desire for clear and short questions without preceding long interpretation and explanation of the problem. In the same manner, the answers in local languages were softer, long and extensively descriptive with few short and clear-cut answers. Those responding in these local languages preferred “middle-ground” answers which can largely be attributed to the mentality of people. Even when respondents answered in a straight and very critical manner, they still preferred to do so after extensive explanation and after “preparing the ground” for it. On the contrary, Russian language responses were more direct, more critical or clear in their message leaving the background information out or offering very little explanation. In addition, in certain interviews, respondents responded to only one part of the interview regarding their lives and experiences in local language and then preferred to switch to Russian when they wanted to be more direct or blunt about their attitude to certain events or happenings.

Secondly, in the case of Kyrgyzstan, majority of those approached have decided to cooperate with the project and to be video-taped. Yet such cooperation with the project also resulted in the situation that sometimes respondents were attempting to provide interviewers with the information that they believed interviewers wanted to hear from them. This, instead, influenced the outcomes of the project because this information did not always reflect real life-time experiences of people but rather their interpretation of the history that they learned from other sources.

5. Outcomes and follow up

As indicated above, the task of recording, preserving and disseminating the qualitative data on what people experienced in their daily lives and on their relations to the ideology and political structure of the

Soviet government Communist party is very urgent and important one. The urgency of this task comes from the fact that many of those who experienced Soviet life and those who have in-depth and detailed knowledge about how people lived at Soviet times are getting older with many of these people passing away. With them, they take away the data which, if properly collected, preserved and distributed, can serve as an essential supplement to the archival and other written sources of history. As indicated above, the selection method, number of interviewed and disparity in their economic, social, ethnic and religious status impacts the outcome of the interviews. Nevertheless, this kind of project provides a new source of information for understanding Socialist life and political structure.

The major outcomes of this project were presented during international workshops in Istanbul (Eurasian Studies conference, March), South Korea (IICAS annual conference), Oral History Workshop in Stockholm, Oral History Workshop in Cambridge University (Department of Social Anthropology) and many others. These workshops, conference and seminars presented the data and served as venues for receiving feedback on how to preserve and disseminate this data. Therefore, the next challenge and task of this project is to design, build and functionalize the data-base on the oral history of everyday life in Central Asia.

The lion part of the academic outcomes of this project is being prepared for publication and cannot yet be made available in this report. They will be published in the next couple of years in the form of few separate volumes and a number of academic papers. Once the essence of interviews is analyzed and made ready for publication, they will also be compiled into a final report of this project and be disclosed in the JFE 21st Century foundation's website with due recognition of a significant contribution made by foundation through the JFE 21st Century Foundation Grants-in-aid for "Asian History Research for FY2008".